

大橋 与一 著

帝政ロシアのシベリア開発と東方進出過程

岩 田 孝 三

実のところロシア人（スラヴ族）が十九世紀を中心にシベリアへの進攻並びに開発についての記述は必しも多いとはいえないが、然しかなりの人達によって試みられている。イギリス系のもので一八八二年に著わされたシーボーム（Seeborn, H.）の「アジアにおけるシベリア（Siberia in Asia）などは厚利の観察力と精細な報告をもって知られている。一八五〇年頃からロシア人のシベリア進出に対してイギリス側の諸報告はむしろ中国側（清国）に同情的立場からして、かなりのシベリアに関する報告書が発表されている。しかしこれに対してロシア人の側からその東方進出と共にシベリア開発の経緯について詳細な記述はロシア語の不習熟のため少くもわれわれの目にふれる機会とは絶無とはいわれないまでもほとんど皆無に近かったのである。

かくて日本人にとってロシア語に習熟する機会の少なかったことがその大きい原因といえる。このことはおのずからロシア側からするシベリア開発と東方進出の事情やその経過を知る機会にめぐまれない結果となり延いては事実以上にシベリアに対するロシアの作爲的意図が浮きぼりにされて世界にうけとられる傾きがなかったとはいえない。かくておのずから帝政ロシア時代の強引な東方侵攻の印象だけが世界の多くの人々にいつの間にか印象させるに至ったといえなくもない。

本著の特色として、まづ著者が優れたロシア語学者でロシア語の読解力に卓絶したものがあつて、従つてこれ迄ロシア人のシベリア進出に関する記述が殆ん

どロシア語の読解力をもたない人達によるものばかりで、はじめからすでにロシア人のシベリア開発について公平な判断が下されない傾向がなきにしもあらずであったのである。本著中でもっとも興味深い点は第二章ロシア・スラヴ民族性格と歴史地理的基盤で、ロシア人によるロシア語の諸報告はかえって自らの民族性の特徴の分析とそのよって来る地理的環境との関連について精細を極めていることはもっとも興味のひかれる所であり著者が地理学者でもある点から又得難い記述でもある。

はじめにスラヴ人は内陸的性格の強い特色をもつに至ったその居住地との深い関連性のある事の指摘には大いに教えられる所がある。その民族性が多くの困難を克服してアジアの内陸を横断し太平洋岸にまで到達させるにいたらしめた事、而してその一連の陸続きのシベリア内部の進出と経営にスラヴ内陸魂をかたむけつくした事についての鋭い指摘はシベリアはじめ東方内陸への執拗な開発としてその民族性の描写はまことに見事である。その一面かつてロシアの名の下に太平洋へ一時的に進出したが結局段々と太平洋の基地を失い、アラスカ迄安価の価額で手ばなすに至ったこの一時的な海洋進出がスラヴ本来の性格からのものでなく、例えばベーリング海峡の名で今ものこるベーリングをはじめ幾多の北欧人探險家達の手によったものでスラヴ人自体の海外進出でなかったこと、折角スラヴ（ロシア）の名の下に海外領土を獲得しながらスラヴの内陸中心性格から海外領土を放棄していく過程が本著の随所に記述されスラヴの民族性格の分析にはきわめて犀利な觀察に深い敬意を表するものである。要するに著者によってスラヴの民族性が内陸には執拗なねばりを示すのに海洋進出、海外活動には必しも習熟していないという民族性の偏向が指摘され、従ってそれだけに陸続きのアジア、シベリアの大陸内を一步一步倦むことなく進出の歩をすすめた開発過程については、ロシア人のシベリア、乃至は東アジア進出に偏見をもつ多くの過去の記述者達には全く看過されてしまっている。

本著中の圧巻ともいふべきはロシア・スラヴ民族性格の地理的基盤を規定した所であつて「ロシア・スラヴ族として国民的発展の主要部分をなした東方スラヴ族がカルパト斜面地方をへて、東ヨーロッパの一隅からいわゆるロシア平原へ移動してきたことからロシア史がスタートし内陸平原がかれらにとって幾世紀と比較的スムーズにまたファミリアな居住の場所であつた」という所からスラヴの民族性格の内陸性偏向の成立過程を示唆し、要するに古代の汎スラヴ人がアジアより遷徙民としてスロヴェンと呼ばれヨーロッパにおける最初の占住地方が東スラヴ族等による沿タニュープ地方であつて、ここからかれらは分派的に移動を続け、結局それぞれ名称を異にするに至つた。すなわちかれらは幾世代滞留するものもあり、或いは通過した地方において原住民との接触が行われ、とくにギリシア人、ローマ人との交渉も深く生じ、それが古代スラヴからの生活について移住スラヴ族の性格を特色づけることになつた。すなわちロシア・スラヴ族のみでなく、南スラヴ人として後にバルカン半島の内陸中心に定住地を展開し、またさらに、スラヴ族の別派は、ロシア平原をこえてバルチック海沿岸に移住し後の白ロシア人、ポーランド人の基礎をなすに至つたことなど、要するに北方スラヴ族が、ドニエプル川沿岸内陸地やあるいはニエマン川と西ドヴィナ川との間の内陸部を發生根源地と想定しその後西方に、南方によりよき生活地域を求めて移動したというスラヴ族の居住分布の過程の記述は何んといつてもロシア語による原典によつてはじめてなされた考証であつて、それだけに本然のスラヴ族と西スラヴ族（例えばチエコスロバキア、ポーランド人）南スラヴ族（ユーゴスラヴィアの諸民族等）の現代的政治関連を示唆する所があつて興味は尽きない。

本著の十七ページにかげられた「東欧平原にかけるスラヴの移動および移民的拡散」の図はきわめて珍しくもあり重要なもので、本図により一目してアジア西部から十三世紀にはロシア・スラヴ族は勿論南スラヴ族や西スラヴ族（ボ

ーランド人)の成立過程が判然とする。そして彼等の移動過程は内陸路をうしおのよせるように漸進して行つた過程が克明に図示され、得難い地図であるといえる。本図によりスラヴ族の性格がその各々の居住環境地から内陸性偏向になつて行く事が一目瞭然である。われわれ地理学徒にとつて重要なことは、今のソ連を知る意味から第二節スラヴの民族形成についての著者の見解で「いまだに全スラヴ人が運命をともにして集団的生活を強化し、スラヴとして統一的發展を計らうとするつよい精神的結集を欠いていたためにカルバート・スラヴが必然的に分派して行かねばならない。またヨーロッパの自然環境から、東、西スラヴの分派化には西スラヴ族定着地方の森林、沼沢地帯の大きい影響があつた事はよくうなづける事実であり適切な指摘であるし、これに対し、東スラヴのそれは、主にドウニエプル川の中部流域地方であつたためにむしろ東スラヴはその自然環境上から集団的發展を強いられたという見解は卓抜で、後次的な居住地の自然環境から東スラヴ、西スラヴ、さらに南スラヴと大きく三つの異つた類型化が形成される説明はわれわれが観念的にはスラヴ族すなわちロシア人といった考え方の適切でない事を知らせてくれる。たしかに西スラヴ族や南スラヴ族の中にはロシア・スラヴ族本然の内陸性の強いものばかりでなく、海洋性に偏向する部族もなくはない。北ヨーロッパことに海洋性のつよいスウェーデン、ノルウェー、デンマーク人などと、接触の深かつたポーランド人など海洋進出の業績を残したのも少くない。

しかし本然のロシア・スラヴ族の内陸偏向の性格の強さはその後、本著の第七章以後のシベリア植民地の開発過程の問題、第八章以後の帝政ロシアの東方進出政策の諸問題等随所の記述の中に克明に見出される。

ロシア人の名による東方進出、シベリア開発の初期は必しも純粹のスラヴ人探險家のみによつてなされたものばかりではなかつた。

前記のベーリングはいふ迄もないがステレル、シパンベルグ等々は北ヨー

ロッパの国々の出身者でありアムール江流域への道を開いたものの中にもデンマーク人をふくむ北ヨーロッパ人が少くなかつた(スラヴ族でなく)。ことに洋海に進出した指導者はピョートル大帝の名の下、いいかえれば帝政ロシアの名の下に活躍した外国人達なのである。

第一節の「十六世紀ないし十九世紀初期におけるシベリア統治制度」のうちことにイエカテリナ二世時代における植民地制度の改革においては専制権力の強化だけの目的ではシベリアのような特異な風土の所では成果があらならないにシベリア統治の特異な施策をスラヴの民族性とシベリアの風土に適應して工夫がなされねばならなくなり「シベリア王国」の呼称が出現し中央集権的性格をもつた名称であるシベリア局名の廃止あたりは、シベリア開発にスラヴ内陸性を如何に吻合をはかつたかが実に克明に記述されており、ロシア人によるシベリア統合が容易なものでなかつた事が知られるのである。アレクサンドル一世時代にシベリア総督に補されたスペランスキー総督によりシベリアの植民地的制度が改革されたことは少くも帝政末期まで続いた経済的・文化的開発に大いに意義があつたという所の記述はこの時の改革からシベリアに対するスラヴ本然の性格に適合させる方向をたどることになつたという点で大いに味うべき著者の記述である。

第九章の帝政ロシア東方進出政策の國際的展開の中において特に満鮮問題の記述は、何を措いても本書を一読するに値するもつとも力作の部分である。目下これ迄のソ連との國境を全面的に否定している中共との間のアムール、ウスリー江の境界紛争の記述は殊にその依つて来る由来が当時清朝側のこの方面における消極的態度に対し帝政ロシア側のきわめて積極的な出方に対する相互の不一致に由来している事、すなわちアムール江とウスリー江による帝政ロシアと清國との間の境界設定の不備、璦琿条約と北京条約とで境界線がこれら諸河川のどの部分を通過させるかという所迄はつきりしたものでなかつた事が、今

に至る迄この方面の紛争の種子となつてゐることにつきこの前後の事情を更に詳細に、また適切な記述をすすめてゐる。現在の中共和ソ連との関係、殊にシベリア方面における境界設定に関する問題点の所在を知る意味できわめて有意義な説明が本書によつて展開する。

またわが国との間で目下問題となつてゐる千島中の択捉島、国後島及びその付近の島々の所屬についてわが国の主張の妥当性を裏づける第十三章の第三節の記述などは單なる国民感情からでなく、淡々とした、しかも厳正なる資料に忠実な本書の記述には全く心からの敬意を表するものである。本書がいつれにしてもロシア側の文獻をもつばら中心として進められながら、ロシア側の主張に流されず、厳正に歴史的事實の分析と解明に當つてゐる事は敬意を表するものであり、しかも地理学、史学關係でロシア語を讀解する人がほとんどいない中で、長年にわたりロシア關係の文獻資料の蒐集に没頭し、遂にイギリス人その他の作爲的なものでなく、民族としてのロシア關係の記述を徹底的に渉獵した事はわが国では全く類のないものでまことに名著であり力作であり永く後世にのこるべきものと深く信ずるものである。（本大学教授・理学博士）

「帝政ロシアのシベリア開發と東方進出過程」（A5版六八八頁九八〇〇円
東海大学出版会刊）